

韓国語における 列挙句の音韻句形成と音韻構造

神戸大学人文学研究科
KWON GYONGBAE
rldqo2@naver.com

1. 背景 2. 先行研究 3. 調査と結果 4. 分析 5. 考察

本稿の記号

μ : モーラ、 σ : 音節
· : 音節境界
: 形態素境界
{ } : 音韻句orアクセント句境界
// : イントネーション句境界
[] : 発話の最末端

1. 背景

● 韓国語の音韻句 (Ahn 2007, 2010, Jung and Shin 2000, Yu 2017)

- ・韓国語音韻論における Accentual Phrase に相当するリズムのまとまりである。
- ・ピッチやポーズ等による内部の認知的・聴覚的切れ目を指す。

(1) a. {a.pa.ci.ka}{paŋ.e}{til.ʌ.kan.ta} b. {a.pa.ci}{ka.paŋ.e}{til.ʌ.kan.ta}
父が 部屋に 入る 父(の) カバンに 入る

● 韓国語の音韻句形成と音韻的長さ

- ・Ahn (2007, 2010) - 音韻的長さは音韻句形成の一つの要因

同一形態素(接頭辞)に後続する要素が長くなるにつれて音韻句の数の増加

(2) 「1音節接頭辞(cʰo “超”) + 後続要素」の音韻句形成と長さの関係

- a. cʰo.in “超人” cʰo.kwa “超過” → {σσ}
- b. cʰo.ca.jan “超自然” cʰo.hjan.sil “超現実” → {σσσ} ~ {σ}{σσ}
- c. cʰo.ca.jan.cak “超自然的” cʰo.hjan.sil.cak “超現実的” → {σσσσ} ~ {σ}{σσσ}
- d. cʰo.ca.jan.cu.ii “超自然主義” cʰo.hjan.sil.cu.ii “超現実主義” → {σ}{σσσσ}

→ 音韻句形成における具体的な作用域の長さに関する研究は少なく、不確かな部分が多い。

● 問題点：音韻句形成における要因の影響力

- ・音韻句の境界位置は意味・形態・統語の境界に強く依存する (Ahn 2010, Oh 2006)
- 要因の影響力：意味・形態・統語のまとまり認識 > 長さ要因
- それらのまとまりを持った分析対象では、音韻的な長さの境界の観測が困難

● 韓国語の列挙句

- ・並列関係の各要素が1音節であるため、意味・形態・統語のまとまりを持たない
- ・先行研究で扱っていない

(3) 韓国語の列挙句の構造

・曜日(7σ): “月. 火. 水. 木. 金. 土. 日”
| | | | | | |
wa.l hwa. su. mok. kim. tʰo. il.
| | | | | | |
σ σ σ σ σ σ σ

→ 意味・形態・統語の影響から独立して、音韻句形成における音韻的な長さ境界の判断が容易である。

2. 先行研究

● 音韻句の具体的な長さに関する研究はまだその数が少ない

● Shin (2014b)

- ・自然発話コーパス・諺の計量的分析

- 音韻句は3音節、イントネーション句は7音節が平均の長さ
- 安定的なイントネーション句の予測
- : 2つの音韻句からなり、前部より後部が長い(3σ+4σ)構造

・分析上の問題

(2音節が無標) (1音節が無標)

- 3音節句の理由: 「語彙形態素 + 文法形態素」の文法単位が多いためであると主張

- 安定的なイントネーション句の予測
- : 統語・意味の中心が右側である言語の特性が反映されるだろうと主張

→ 調査と分析両面において意味・形態・統語要因に依存している

● 韓国語における列挙句の音韻句形成

- ・Shin(2014b)の予測とは異なる列挙句の音韻句構成が観測される

(4) 日常で観測される列挙句における音韻句形成パターン

曜日: (7σ) wa.l hwa. su. mok. kim. tʰo. il “月.火.水.木.金.土.日”

(×) a1. Shin(2014b)の予測: (3σ+4σ) *{wa.l hwa. su}{mok. kim. tʰo. il}

(○) a2. 実際の出現パターン: (4σ+3σ) {wa.l hwa. su. mok}{kim. tʰo. il}

→ 先行研究の結果だけでは説明ができない。

- ▶ ここまでの背景を受けて、本研究では列挙句の音韻句がどのような構造をもつのかについて調査を行う。

3. 調査と結果

3.1 調査

3.2 結果

- 3.2.1 全体の結果
- 3.2.2 音韻句の形成パターン
- 3.2.3 音韻句の数
- 3.2.4 音韻句の長さとし起位置

3.1 調査

● 調査対象：列挙句

- ・ 暗唱リズムが何らかの理由で定着しているものは除外
- ・ 異なる長さを持つ5種の列挙句を抽出

(5) 抽出列挙句 (元)

- a. 十干 : kap.il.pjaj.ɕaj.mu.ki.kjaj.sin.im.kje “甲乙丙丁戊己庚辛壬癸” (10σ)
- b. 惑星 : su.kim.ci.hwa.mok.tʰo.ɕʰan.he.mjaj “水金地火木土天海明” (9σ)
- c. 音階 : to.re.mi.pʰa.sol.la.si.to “ドレミファソラシド” (8σ)
- d. 曜日 : wal.hwa.su.mok.kim.tʰo.il “月火水木金土日” (7σ)
- e. 朝鮮王名の頭文字 : ɕaj.sun.han.ɕʰal.ko.sun “正純憲哲高純” (6σ) (22~27代)

→ e.朝鮮王朝名：1~21代までは7音節(4音節+3音節)のまとまりでリズムが定着
22~27代は長い句の最後半部で、かつ6音節 → その処理が決まってない

(5)の各列挙句の変化型を作成：計35の型

- 全て発音する形から、句末方向から1音節ずつ減らし2音節句になるまでのもの

- a.十干：10音節～2音節(9型) b.惑星：9音節～2音節(8型) c.音階：8音節～2音節(7型)
d.曜日：7音節～2音節(6型) e.朝鮮王名：6音節～2音節(5型) ・計35型

(6) 調査対象 (計35型)

調査対象	例	元が7音節の場合 (X=7σ)
完全型(元)	(X)σ	(7σ) wal.hwa.su.mok.kim.tʰo.il “月火水木金土日”
↑	(X-1)σ	(6σ) wal.hwa.su.mok.kim.tʰo “月火水木金土”
	(X-2)σ	(5σ) wal.hwa.su.mok.kim “月火水木金”
↓	⋮	⋮
最短型	2σ	(2σ) wal.hwa “月火”

・ 多様な長さに変形することで 同じ列挙句における長さのバリエーションを形成
→ 結果の偏りが長さによるものか、特定の列挙句によるものか判断できる。

● 調査方法

- ・ 12人のソウル方言話者(10~30代、男女各6人)に聞き取り調査
→ 35 x 12 = 420例を対象
- ・ 韓国語の音韻的知識と研究経験を持った母語話者2名による聴覚的・認知的判断に基づいて音韻句を判断
- ・ リズムの境界の判定が難しい速い発話速度、発音の崩れ、棒読み等が生じた一部の例は除外し、かつ母語話者2名の聴覚的・認知的判断が一致したもののみを選別
→ 計383/420例を分析対象とする

3. 調査と結果

3.1 調査

3.2 結果

- 3.2.1 全体の結果(列挙句別)
- 3.2.2 音韻句の形成パターン
- 3.2.3 音韻句の数
- 3.2.4 音韻句の長さとし起位置

3.2.1 全体の結果 (列挙句別)

→ 列挙句の種類(㉑~㉓)にかかわらず、長さ(a~i)に基づいて一定のパターンが出現

表1. 列挙句(元)と調査例の長さ別音韻句形成(計383例)

	出現パターン	①十干:10σ	②惑星:9σ	③音階:8σ	④曜日:7σ	⑤王名:6σ
a.10σ	4σ+4σ+2σ (91%: 10/11) 4σ+2σ+4σ (9%: 1/11)	91% (10/11) 9% (1/11)	x	x	x	x
b.9σ	4σ+5σ (48%: 10/21) 4σ+4σ+1σ (33%: 7/21) 4σ+2σ+3σ (19%: 4/21)	45.5% (5/11) 45.5% (5/11) 9% (1/11)	50% (5/10) 20% (2/10) 30% (3/10)	x	x	x
c.8σ	4σ+4σ (94%: 31/33) 4σ+2σ+2σ (3%: 1/33) 3σ+5σ (3%: 1/33)	100% (11/11) - -	91% (10/11) 9% (1/11) -	91% (10/11) - 9% (1/11)	x	x
d.7σ	4σ+3σ (98%: 43/44) 3σ+4σ (2%: 1/44)	100% (11/11) -	100% (11/11) -	91% (10/11) 9% (1/11)	100% (11/11) -	x
e.6σ	4σ+2σ (85%: 47/55) 3σ+3σ (11%: 6/55) 2σ+4σ (4%: 2/55)	91% (10/11) - 9% (1/11)	75% (9/12) 17% (2/12) 8% (1/12)	91% (10/11) 9% (1/11) -	90% (9/10) - 10% (1/10)	73% (8/11) 27% (3/11) -
f.5σ	5σ (22%: 12/54) 4σ+1σ (56%: 30/54) 3σ+2σ (7%: 4/54) 2σ+3σ (15%: 8/54)	36% (4/11) 64% (7/11) - -	27% (3/11) 27% (3/11) - 36% (4/11)	9% (1/11) 73% (8/11) 9% (1/11) 9% (1/11)	18% (2/11) 64% (7/11) - 18% (2/11)	18% (2/11) 45% (5/11) 27% (3/11) 9% (1/11)
g.4σ	4σ (84%: 46/55) 2σ+2σ (16%: 9/55)	91% (10/11) 9% (1/11)	73% (8/11) 27% (3/11)	100% (10/10) -	75% (9/12) 25% (3/12)	82% (9/11) 18% (2/11)
h.3σ	3σ (98%: 54/55) 2σ+1σ (2%: 1/55)	100% (11/11) -	91% (10/11) 9% (1/11)	100% (11/11) -	100% (11/11) -	100% (11/11) -
i.2σ	2σ (100%: 55/55)	100% (11/11)	100% (11/11)	100% (11/11)	100% (11/11)	100% (11/11)

3.2.2 音韻句の形成パターン

●表1から導かれる4つのパターン

- ・ **パターン I**
 - ・ 句頭から4音節句のテンプレートを形成後、残りは句末で処理
 - ・ 最も無標 (計84%)
 - ・ **パターン II**
 - ・ 末尾で5音節句が生起
 - ・ 生起する列挙句内の占有率が2番目 (b・c・f)
 - ・ 全体における生起数は少ない (計6%)
 - ・ **パターン III**
 - ・ 句頭/句中で2音節句が生起
 - ・ 各例においては低占有率
 - ・ 全体において散発的に現れる (計7%)
 - ・ **パターン IV**
 - ・ 句頭で3音節句が生起
 - ・ 朝鮮22~27代王名で6例が生起 (表1 - e⑤・f⑤) / 話者5人
 - ・ 韓国の人名(3音節のテンプレート)を連想させる
 - ・ 4例は話者一人に集中して生起
- 11例中10例が語認識と個人の癖により生起：例外として扱う

表2. 音韻句形成のパターンとその割合

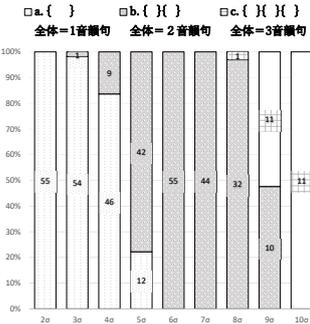
	I	II	III	IV	計
a.10σ	{4σ}{4σ}{2σ} 91% (10)	—	{4σ}{2σ}{4σ} 9% (1)	—	100% (11)
b.9σ	{4σ}{4σ}{1σ} 38% (7)	{4σ}{5σ} 43% (10)	{4σ}{2σ}{3σ} 19% (4)	—	100% (21)
c.8σ	{4σ}{4σ} 94% (31)	{3σ}{5σ} 3% (1)	{4σ}{2σ}{2σ} 3% (1)	—	100% (33)
d.7σ	{4σ}{3σ} 98% (43)	—	—	{3σ}{4σ} 2% (1)	100% (44)
e.6σ	{4σ}{2σ} 85% (47)	—	{2σ}{4σ} 4% (2)	{3σ}{3σ} 11% (6)	100% (55)
f.5σ	{4σ}{1σ} 56% (30)	{5σ} 22% (12)	{2σ}{3σ} 15% (8)	{3σ}{2σ} 7% (4)	100% (54)
g.4σ	{4σ} 84% (46)	—	{2σ}{2σ} 16% (9)	—	100% (55)
h.3σ	{3σ} 98% (54)	—	{2σ}{1σ} 2% (1)	—	100% (55)
i.2σ	{2σ} 100% (55)	—	—	—	100% (55)
計	(323)	6% (23)	7% (26)	3% (11)	100% (383)

- 例1) f.5σ “水金地火木”
: su.kim.ci.hwa.mok
- I {su.kim.ci.hwa}{mok}
II {su.kim.ci.hwa.mok}
III {su.kim}{ci.hwa.mok}
IV {su.kim.ci}{hwa.mok}
- 例2) b.9σ “水金地火木土天海明”
: su.kim.ci.hwa.mok.tʰo.cʰan.he.mjaŋ
- I {su.kim.ci.hwa}{mok.tʰo.cʰan.he}{mjaŋ}
II {su.kim.ci.hwa}{mok.tʰo.cʰan.he.mjaŋ}
III {su.kim.ci.hwa}{mok.tʰo}{cʰan.he.mjaŋ}

3.2.3 音韻句の数

●4音節の作用域と音韻句の数

図1. 列挙句の長さから生起音韻句の数



・ 列挙句の長さから構成音韻句の数
: 4音節の倍数を境にして音韻句の数が増加する傾向

列挙句の長さ	無標の音韻句の数
2~4音節	1つ (a.94% : 155/165)
5~8音節	2つ (b.93% : 173/186)
9~10音節	3つ (c.69% : 22/32)

- (7) 列挙句が6音節の場合
- a. 1つ : 0%
*{su.kim.ci.hwa.mok.tʰo} (*6σ)
- b. 2つ : 100%
{su.kim}{ci.hwa.mok.tʰo} (2σ + 4σ)
{caŋ.sun.han}{cʰal.ko.sun} (3σ + 3σ)
{caŋ.sun.han.cʰal}{ko.sun} (4σ + 2σ)
- c. 3つ : 0%
*{caŋ.sun}{han.cʰal}{ko.sun} (*2σ + 2σ + 2σ)

3.2.4 各音韻句の長さから生起位置

●列挙句を構成する622の音韻句の長さから生起位置

表3. 各音韻句の長さから生起位置

	句頭	句中	句末	計
{1σ}	0% (0)	0% (0)	10% (38)	6% (38)
{2σ}	9% (20)	26% (6)	33% (126)	25% (152)
{3σ}	6% (12)	0% (0)	30% (115)	20% (127)
{4σ}	85% (184)	74% (17)	21% (81)	46% (282)
{5σ}	0% (0)	0% (0)	6% (23)	4% (23)
計	100% (216)	100% (23)	100% (383)	100% (622)

- (8) 音韻句の長さから生起位置の制限
- a. 6音節以上の生起は皆無
*{wal.hwa.su.mok.kim.tʰo} (*6σ) “月火水木金土”
- b. 最も無標は4音節句
- c. 1音節句・5音節句の生起位置は句末に限る
{wal.hwa.su.mok.kim} (5σ)
{wal.hwa.su.mok}{kim} (4σ + 1σ)
*{wal}{hwa.su.mok.kim.tʰo} (*1σ + *5σ)
*{wal.hwa}{su}{mok.kim} (2σ + *1σ + 2σ)

4. 分析

- 4.1 パターン I
- 4.2 パターン II
- 4.3 パターン III
- 4.4 まとめ

4.1 パターン I

●最も無標のパターン(84% : 323/383)

表4. 4音節句保持の細別 (X ≤ 4)

Input	Output	例
a. 2~4σ	{...4σ} (94% : 155/165)	{3σ→3σ} {kap.il.pjaŋ} “甲乙丙” {4σ→4σ} {kap.il.pjaŋ.caŋ} “甲乙丙丁”
b. 5~8σ	{4σ}{Xσ} (81% : 151/186)	{5σ→4σ + 1σ} {kap.il.pjaŋ.caŋ}{mu} “甲乙丙丁戊己” {7σ→4σ + 3σ} {kap.il.pjaŋ.caŋ}{mu.ki.kjaŋ} “甲乙丙丁戊己庚”
c. 9~10σ	{4σ}{4σ}{Xσ} (52% : 17/33)	{9σ→4σ + 4σ + 1σ} {kap.il.pjaŋ.caŋ}{mu.ki.kjaŋ.sin}{im} “甲乙丙丁戊己庚辛壬” {10σ→4σ + 4σ + 2σ} {kap.il.pjaŋ.caŋ}{mu.ki.kjaŋ.sin}{im.kje} “甲乙丙丁戊己庚辛壬癸”

- ・ 句頭から4音節を超えると音韻句の数が増加する
- **音韻句形成の作用域 : 4音節長**

● 1音節句の生起：パターン I の句末位置に限る

・ 句末位置の残り句 (表4の{Xσ}) でのみ生起 (37/38例)

- (9) a. 5音節 : kap.il.pjaŋ.caŋ.mu “甲乙丙丁戊”
 → 4音節+1音節 {kap.il.pjaŋ.caŋ}{mu}
- *1音節+4音節 *{kap}{il.pjaŋ.caŋ.mu}
 *2音節+1音節+2音節 *{kap.il}{pjaŋ}{caŋ.mu}
- b. 9音節 : kap.il.pjaŋ.caŋ.mu.ki.kjaŋ.sin.im “甲乙丙丁戊己庚辛壬”
 → 4音節+4音節+1音節 {kap.il.pjaŋ.caŋ}{mu.ki.kjaŋ.sin}{im}
- *1音節+4音節+4音節 *{kap}{il.pjaŋ.caŋ.mu}{ki.kjaŋ.sin.im}
 *4音節+1音節+4音節 *{kap.il.pjaŋ.caŋ}{mu}{ki.kjaŋ.sin.im}

→ 限られた位置と長さでしか生起しない：有標性示唆
 ▶リズムにおける4音節の境界と1音節句の有標性は列挙句のみで起こる現象ではない

● 韓国の伝統リズムと4音節長 (Kim S.H 1993, Yoon 2014)

・ 伝統的な定型詩や童謡等は3音節・4音節、または4音節・4音節のまとまりがリズムの基本

(10) 伝来童謡の基本構造：「4音節+4音節」(4・4調)

(4σ+4σ) se.ja.se.ja // p^ha.raŋ.se.ja 鳥よ鳥よ 青島よ
 (4σ+4σ) nok.tu.pat.e // an.ci.ma.ra 緑豆畑に 止まるな
 (4σ+4σ) nok.tu.k'ot.i // t'ɿ.l.a.ci.mjʌn 緑豆花が 散ったら
 (4σ+4σ) c^haŋ.po.caŋ.su // ul.ko.kan.ta 清泡屋が 泣いて行く

→ 5音節以上の句はリズムのまとまりとして避けられる 「鳥よ鳥よ青島よ」

● 韓国語における韻律最小性条件(Prosodic Minimality Requirement) (Lee 1993)

・ 音韻句・音韻語の長さは少なくとも2モーラ以上である

- Phonological Phrase = PrWd ≅ Foot (2μ)

(11) 発話における1音節句の伸張

- a. [na]^{NP} [kan.ta]^{VP} → {na}{kan.ta} (*{na}{kan.ta}) “私、行く”
 b. [na.kan.ta]^{VP} → {na.kan.ta} (*{na:kan.ta}) “でる”

→ 音韻句として1モーラ句は短いため回避される

● 4音節句テンプレートの保持・1音節句の回避

→ 位置的忠実性(Positional Faithfulness) との関わり

：ある音韻階層において、各種の音韻対立が初頭では保持されやすく、末尾になると中和されやすくなる(Beckman 1998, 田中 2008)

(12) 位置による4音節句と1音節句 ([] は列挙句の末端)

句頭位置	》	(句中位置)	》	句末位置	
{○○○○}	...	○○○○●	句末	→ [({○○○○}) {○○○○}●]	
a. [{4σ} {4σ} {Xσ}]	
b. [*{1σ} *{1σ} *{1σ}]	→ [({4σ}) {4σ} {1σ}]

- 例1) 5σ → (4σ+1σ) {su.kim.ci.hwa}{mok} “水金地火木”
 例2) 9σ → (4σ+4σ+1σ) {su.kim.ci.hwa}{mok.t'ɔ.c^hʌn.he}{mjʌŋ} “水金地火木土天海明”

- ・ 句頭・句中における4音節句を保持 → 4音節の作用域
 ・ 1音節句の生起制限：句末が「4音節+1音節」になる環境 → 1音節句の有標性確認

4.2 パターン II

● 5音節句の生起

表 5. 5音節句生起型 (6% : 22/383)

Input	Output	例
a. 5σ	{5σ} : 22% (12/54)	{su.kim.ci.hwa}{mok} “水金地火木”
b. 9σ	{4σ}{5σ} : 43% (10/21)	{su.kim.ci.hwa}{mok.t'ɔ.c ^h ʌn.he.mjʌŋ} “水金地火木土天海明”
c. 8σ	{3σ}{5σ} : 3% (1/33)	{to.re.mi}{p ^h a.sol.la.si.to} “ドレミファソラシド”
d. 6σ	*{1σ}{5σ} : 0% (0/55)	*{su.kim.ci.hwa}{mok.t'ɔ} “水金地火木土”
7σ	*{2σ}{5σ} : 0% (0/44)	*{to.re.mi.p ^h a}{sol.la.si} “ドレミファソラシ”
10σ	*{5σ}{5σ} : 0% (0/11)	*{kap.il.pjaŋ.caŋ.mu}{ki.kjaŋ.sin.im.kje} “甲乙丙丁戊己庚辛壬癸”

・ c.以外は、前部をパターン I で処理時、句末が「4音節+1音節」になる環境で生起 (d 参照)
 → 5音節句：4音節の作用域が末尾位置で拡張した有標なもの

(13) 句末における4音節句境界の拡張 ([] は列挙句の末端)

...	4σ+1σ		5σ
...	{○○○○}{●}	句末の拡張 →	... {○○○○●}
	{su.kim.ci.hwa}{mok}		{su.kim.ci.hwa}{mok} “水金地火木”

● 「4音節+5音節」と二枝分かれ構造

・ 列挙句の長さ占有：5音節(a.22%) < 9音節(b.43%) → 約2倍の差

- (9音節) 4音節+4音節+1音節：3句構造 → 4音節+5音節：2句構造化

→ 韓国語における2枝分かれ構造への指向性が影響

- 伝統的な定型詩・歌謡の基本的な構造(Kim S.H. 1993, Won 2003, Kim J.H. 2003, Yoon 2014)
 - 諺の最も無標な構造 (Shin 2014b)

(14) 9音節句の生起と二枝分かれ構造 ([] は列挙句の末端)

4σ+4σ+1σ		4σ+5σ
{○○○○}{○○○○}{●}	二枝分かれ →	{○○○○}{○○○○●}
{su.kim.ci.hwa}{mok.t'ɔ.c ^h ʌn.he}{mjʌŋ}	構造化	{su.kim.ci.hwa}{mok.t'ɔ.c ^h ʌn.he.mjʌŋ}
		“水金地火木土天海明”

- ・ 9音節の列挙句を処理
 → 各音韻句の安定への意識：4音節の作用域保持 (4音節+4音節+1音節)
 → 列挙句全体の安定への意識：二枝分かれ構造化 (4音節+5音節)

4.3 パターン III

● 2音節句の生起 (7% : 26/383例)

・ ①~7音節の列挙句 → {2音節}{X音節} ②7~10音節の列挙句 → {4音節}{2音節}{X音節}

● 1音節句・5音節句生起の回避意識の確認

・ 7音節列挙句における生起は皆無

- ①と②のどのパターンでも、1音節句・5音節句の生起が予測される長さである

- 例) ① *{2音節}{5音節} (0%: 0/44) ② *{4音節}{2音節}{1音節} (0%: 0/44)
 *{kap.il}{pjaŋ.caŋ.mu.ki.kjaŋ} *{kap.il.pjaŋ.caŋ}{mu.ki}{kjaŋ} “甲乙丙丁戊己庚”

・ 列挙句が5音節 (15%: 8/54) と9音節 (19%: 4/21) の場合、他 (2~9%) より占有率が高い

：パターン I・II で処理時 → 1音節句・5音節句が生起する長さ

→ 有標な1音節句と5音節句の回避意識が影響

(16) 2音節句の生起 (高頻度類)

(4σ+) 4σ+1σ	(4σ+) 5σ	(4σ+) 2σ+3σ
{○○○○}{○○○○}{●}	or	{○○○○}{○○○○●}
{su.kim.ci.hwa}{mok}	{su.kim.ci.hwa}{mok}	{su.kim}{ci.hwa}{mok} “水金地火木”

4.4 まとめ

●音韻句の形成パターン

- ①左側から4音節を超えると音韻句の数が増加
→ 音韻句形成における4音節の作用域を確認
- ②1音節句・5音節句は有標なもの
-句末が「4音節+1音節」で処理される環境で生起
→ 位置的忠実性・二枝分かれ構造などの音韻現象との関わりにより制限的に生起する有標なもの
- ③パターンIIとパターンIIIはパターンIのゆれとして出現する

25

(17) 列挙句における音韻句の形成

a. 揺れの生起

[((4σ) + 5σ) → ①基本 : [({○○○○}) {○○○○}{●}] (4σ+1σ)
 [({○○○○}) ○○○○●]_{句末} → ②揺れ1 : [({○○○○}) {○○○○●}] (5σ)
 → ③揺れ2 : [({○○○○}) {○○}{○○○}] (2σ+3σ)

b. 例1) d.5σ : su.kim.ci.hwa.mok “水金地火木”

①{su.kim.ci.hwa}{mok} > ②{su.kim.ci.hwa.mok} > ③{su.kim}{ci.hwa.mok}

c. 例2) h.9σ : su.kim.ci.hwa.mok.tʰo.cʰʌn.he.mjʌŋ “水金地火木土天海明”

②{su.kim.ci.hwa}{mok.tʰo.cʰʌn.he.mjʌŋ}

> ①{su.kim.ci.hwa}{mok.tʰo.cʰʌn.he}{mjʌŋ}

> ③{su.kim.ci.hwa}{mok.tʰo}{cʰʌn.he.mjʌŋ}

26

5. 考察：韻律語・日本語との関連性

5.1 オノマトペと小数の伸張

5.2 短縮語の形成

- ▶ 列挙句で観測できた音韻句の4音節の作用域と韓国語の他の言語現象(オノマトペ・短縮語)との関わり、延いては、日本語との共通性を考察する。

27

5.1.1 韓国語のオノマトペと4音節の境界

●オノマトペの分布 (Kim, I. H. 1995)

- ・3つの辞書登録語の語基(4622語対象)：2音節～4音節語が無標(92%)
→ 5音節以上のものは2%以下

●語基の拡張と音韻句形成

- ・オノマトペの形態的拡張：完全重複と部分重複 (Kim, H.S 2014)
- 完全重複：語基をそのまま重複

(18) kwaŋ → kwaŋ.kwaŋ “ドンドン”
 pu.liŋ → pu.liŋ.pu.liŋ “ぶるんぶるん”
 tuŋ.sil → tuŋ.sil.tuŋ.sil “ふわふわ”

- 部分重複：語基の接頭・接尾の部分的重複

(19) kwaŋ → kwa.kwaŋ “ドドン” (接尾重複)
 pu.liŋ → pu.li.liŋ “ぶるるん” (接尾重複)
 tuŋ.sil → tu.tuŋ.sil “ふんわり” (接頭重複)

28

・音韻句の形成：4音節を境にして音韻句の数が増加

- 4音節までは1つの音韻句で処理(a-c)、5音節以上は2つの音韻句で処理(d-e)

(20) オノマトペの音韻句形成 (語1:エンジン音、語2:金属類の音)

全体の長さ	①語1	②音韻句形成1	①語2	②音韻句形成2
a.2σ (基本)	pu.liŋ	{pu.liŋ}	cʰal.kʰak	{cʰal.kʰak}
b.3σ (部分)	pi.li.liŋ	{pi.li.liŋ}	cʰal.kʰa.tak	{cʰal.kʰa.tak}
c.4σ (完全)	pu.liŋ#pu.liŋ	{pu.liŋ.pu.liŋ} ?{pu.liŋ}{pu.liŋ}	cʰal.kʰak#cʰal.kʰak	{cʰal.kʰak.cʰal.kʰak} ?{cʰal.kʰak}{cʰal.kʰak}
d.5σ (部分+複合)	pi.li.liŋ#pu.liŋ	{pi.li.liŋ}{pu.liŋ} *{pi.li.liŋ.pu.liŋ}	cʰal.kʰa.tak # cʰal.kʰak	{cʰal.kʰa.tak}{cʰal.kʰak} *{cʰal.kʰa.tak.cʰal.kʰak}
e.6σ (部分の完全重複)	pi.li.liŋ#pi.li.liŋ	{pi.li.liŋ}{pi.li.liŋ} *{pi.li.liŋ.pi.li.liŋ}	cʰal.kʰa.tak # cʰal.kʰa.tak	{cʰal.kʰa.tak}{cʰal.kʰa.tak} *{cʰal.kʰa.tak.cʰal.kʰa.tak}

- 音韻句形成における4音節長の作用域が確認できる

29

5.1.2 日本語における数字の伸張と4モーラの境界

●日本語のアクセント句

- ・数字の羅列 (田中・窪蘭 1999, 窪蘭 2004, 田中2008)
→ アクセント句：4モーラのテンプレートを形成

(21){なな・にー}{いち'・の}{にー・はち}{なな・ごー} “721-2875”

●小数の伸張 (田中 2008)

- ・小数の発音における末尾1モーラの伸張は、句末の4モーラのテンプレートを満たす場合に、義務的に生じる。(テンプレートから外れると、随意になる)

(22) a. {にー・てん}ご (ー)
 b. {にー・てん}{ごー・にー} (*{にー・てん}{ごー・にー})
 c. {にー・てん}{ごー・にー} に(ー)
 d. {にー・てん}{ごー・にー}{にー・ごー} (*{にー・てん}{ごー・にー}{にー・ごー})

- 4モーラと5モーラの間で音韻現象の違いが生じる
：4モーラの作用域

30

5.2.1 韓国語における短縮語形成と音韻句

●音韻階層の支配関係 (Selkirk 1984)

- ・上位階層は一つ以上の下位階層からなり、上位階層は下位階層を直接支配する
→すぐ上の上位階層である音韻句は韻律語の最大の長さに関わりを持つ

●韓国語の短縮語

- ・形成方法による2パターンが存在

A. 「頭音節語 (syllabic initialism)」: 構成要素の1音節 (主に頭音節) を取って形成

- (23) a.i.si#g.me.ri.k'a.no → a.a “アイス・アメリカノ
cʰi.ci#ke.i.ki → cʰi.ke “チーズ・ケーキ”

B. 「切断語 (clipping)」: 語の一部を削除(主に後部)して形成

- (24) nɛ.pi.ke.i.sjan → nɛ.pi “ナビgation”
pʰe.mi.ni.si.tʰi → pʰe.mi “フェminist”

- ・短縮語において、5音節以上のものは殆ど生起しない(金 1997, Son 2015, Lee 2011)
→ 原型の音節数・構成要素の数と関係なく、5音節以上の語は禁止される

31

●5音節以上からなる短縮語の形成回遡

(25) A. 切断語形成

- (6σ) jo.kʰi.sja.te.li.a → (3σ) jo.kʰi.sja “Yorkshire Terrier”
(6σ) kʰi.li.ki.si.tan → (4σ) kʰi.li.ki.si “Kyrgyzstan”
(7σ) il.la.su.ti.le.i.sjan → (4σ) il.la.su.ti “illustration”
*(5σ) il.la.su.ti.le

- 原型の音節数と関係なく、5音節以上の生起は禁止される

(26) B. 頭音節語形成

- a.(3要素) tʰik.pal#co.sa#y.wan.ho → tʰik.co.y (3σ) “特別#調査#委員会”
b.(6要素) pan#min.cok#heŋ.y#tʰik.pal#co.sa#y.wan.ho “反#民族#行為#特別#調査#委員会”
→ c.(予測)*pan.min.heŋ.tʰik.co.y (*6σ) / *pan.min.tʰik.co.y (*5σ)
→ d. pan.min.tʰik.y (4σ)

- 原型の構成要素の数と関係なく、5音節以上の生起を回遡

- ・金(1997: 15p): 「5音節以上になると、リズム感が顕著に減り、効率性が落ちるため」
阻止される
→ **リズムの影響(つまり、4音節の作用域)による語形成の制限を示唆**

32

5.2.2 日本語における短縮語形成

●日本語の短縮

- (27) 日本語の短縮語 (#は形態素境界)

- a. 単純語短縮: リストラ (クチャリング)、バーテン (ダー)、イラスト (レーション)
b. 複合語短縮: エア#コン#ディ#ショ#ナ → エア#コン、コス#チュ#ム#ブレ#ス → コス#ブ

- ・短縮語の長さは**4モーラ長さを超えない**(Ito 1990, 窪蘭1998)

・単純語短縮

- ・「短縮型が5モーラ以上の長さにならないのは、5モーラも残したのでは短縮したことはないからである」(窪蘭 1998: 9p)

・複合語の短縮

- ・4モーラ語が最も無標で、それを越えるものは有標(日比谷1998, Irwin 2011)

- **韓国語と似たような長さの制限がみられる**

33

6. まとめ

●韓国語における列挙句の音韻句形成と言語現象

・4音節の作用域の存在を確認

- 4音節を超えると音韻句の数が増加する型が無標
- オノマトペにおける音韻句形成・短縮語形成における4音節長の作用域の存在を確認
- 上記現象と日本語との類似性確認

・1音節句・5音節句は句末でのみで生起する有標なもの

- 位置的忠実性、韻律最小性条件、二枝分かれ構造の音韻現象の影響によるゆれから生起する有標なもの

34

参考文献

- Ahn, Byoung-seob. (2007). A Critical Review of the Studies on the Functions of Pause in Korean. *The Studies of Korean Language and Literature*, 8, 67-87. [In Korean]
- Ahn, Byoung-seob. (2010). *Korean Prosody and Phonology*. Worin Publishing. [In Korean]
- Ahn, Byoung-seob. (2014). Phonological Word is not a Prosodic Unit in Korean. *Korean Language Research*, 34, 139-162. [In Korean]
- Bas, Ju-Chae. (2011). 「田語音韻論概説」城南: 新丘文化社. [In Korean]
- Beckman, Jill N. (1998). *Positional faithfulness: An Optimality Theoretic Treatment of Phonological Asymmetries*. Ph.D. dissertation, UMass. [Garland, 1999]
- Chung, Young-Hee. (1991). *The lexical tone system of North Kyungsang Korean*. Ph.D. dissertation, The Ohio State University.
- 日比谷潤子 (1998) 「複合語短縮」『世界の日本語教育』8, 47-65.
- Irwin, Mark. (2011). *Loanwords in Japanese*. John Benjamins Publishing.
- Itô, Junko. (1990). Prosodic minimality in Japanese. *CLS* 26(2), 213-239.
- Jung, Myung Sook and Shin, Ji Young. (2000). A Study on Korean Time Unit. *Korean Linguistics*, 12, 261-278. [In Korean]
- Jun, Sun-Ah. (1993). *The phonetics and phonology of Korean prosody*. Ph.D. dissertation, Ohio State University.
- Jun, Sun-Ah. (2000). K-tobi (korean tobi) labelling conventions: Version 3. *The Korean Journal of Speech Sciences*, 7(1), 143-169.
- Jun, Sun-Ah. (2002). Syntax over focus. *Proceedings of the Seventh International Conference on Spoken Language Processing (ICSLP)*. John, H.L. Hansen & Bryan Pellom (eds.), 2281-2284, Denver, Colorado.
- Kim, In-Hwa. (1995). *A study on the Lexicon Exhibiting Symbolism in Modern Korean*. Ph.D. dissertation, Ewha Womans University. [In Korean]
- Kim, Jeong-hwa. (2002). Reconsideration of <7・5cho>. *The Korean Language and Literature*, 285-318. [In Korean]
- Kim, Jeong-hwa (2003) 「詩調の形態的特質」『造語学と韓国文化』32, 283-316. [In Korean]
- Kim, Jin-hee. (2014). The Conundrum in the Sijo Metrics. *Korean Classical Poetry Studies*, 36, 301-334. [In Korean]
- Kim, Jungsun. (2009). DOUBLE Accent in Loanwords of North Kyung- sang Korean and Variable Syllable Weight. *Language Research*, 45(1), 67-83.
- Kim, Sae-Hee. (1993). *An Analysis of Five to Six Old' Preferences for Korean Traditional Children's Rhymes*. Ph.D dissertation, Ewha Womans University.
- Kim, Hyung-Soo. (2014). Sound Symbolism in Korean: The morpho-phonological patterns of extension and reduction. *The Linguistic Association of Korea Journal*, 22(4), 275-296. [In Korean]
- 金明姫 (1997) 「現代韓国語の頭字語形成に関する一考察」『研究論文集』35, 1-19. [In Korean]

35

- 窪蘭晴夫 (1998) 「モーラと音節の普遍性 (<特集> 音節とモーラの理論)」『音声研究』2, 5-15.
- 窪蘭晴夫 (2004) 「音韻構造から見た単純語と合成語の境界」『音声学研究会編「文法と音声IV」123-143. くろしお出版.
- 栗田英二 (2011) 「定型詩における字余りの研究」『東洋学』20, 375-401.
- Kwon, Kyung-Keun. (2017). Prosodic Units and Korean Pronunciation Education. *Journal of Urmal Research: The Korean Language and Literature*, 48, 5-26.
- Lee, Jieun (2011) 「韓国語に現れる略語の音節規則研究: 日本語の略語との音節比較」 韓国言語文化教育学会学術大会2011
- Lee, Yongsung. (1993). Prosodic minimality and phonological rules in Korean. Workshop on Interphase Areas in Korean Linguistics, Ohio State University.
- 森藤子 (1998) 「文中における1モーラ語の伸張」日本音声学会第297回研究会口頭発表.
- Michael, K. & Sohn, H.S. (1998). Accentual adaptation in North Kyungsang Korean. *Mt. MIT*.
- Oh, Mira. (2006). Phonetic Realizations of Focus and Topic in Korean. Paper presented at the 2006 Conference of the Korean Society for Language and Information. Kangwon, Korea. [In Korean]
- Oh, Mira. (2008). Prosody and Information Structure: Phonetic Realizations of Focus and Topic in Korean. *Speech Sciences*, 15(2), 7-19. [In Korean]
- Poser, William J. (1990). Evidence for foot structure in Japanese. *Language*, 66(1), 78-105.
- Selkirk, Elisabeth O. (1986). *Phonology and syntax: the relationship between sound and structure*. MIT press.
- Shin, Jiyoung. (2014a). Prosody in Spoken Korean. *Korean Semantics*, 44, 119-139. [In Korean]
- Shin, Jiyoung. (2014b). *Korean phonetics and phonology*. Seoul: Pagjiong Press. [In Korean]
- Son, Se-mo-dol. (2015). A study on influence factors for deciding shorthand's form in Korean. *Korean language research*, 38, 105-135. [In Korean]
- Sung, Kiok (1985) 「歴史的3格 (7・5調) と伝統性の問題」『蔚山語文論集』2, 135-172. [In Korean]
- 田中真一 (1998) 「川柳とプロ野球声援における「字余り」と音節」日本音声学会第116回大会子集、10-15.
- 田中真一・窪蘭晴夫 (1999) 『日本語の発音教室: 理論と練習』東京: くろしお出版.
- 田中真一 (2008) 「リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造」東京: くろしお出版
- Yoon, Juun. (2014). *A Study on the Korean Education Using the Korean Traditional Children's Song*. Master dissertation, Ulsan University. [In Korean]
- Yu, So-yeon. (2017). A Study on the Hierarchy of Phonological units and Phonological words, *The Korean Language and Literature*, 180, 139-177. [In Korean]
- 倉柄爽 (1978) 「新體詩の律格考察」『語文学』37, 105-136. [In Korean]
- Won, Yong-Moon (2003) 「古典詩歌の律格問題」『青藍語文教育』, 1-40. [In Korean]

36